

『北京版西藏大蔵経丹殊爾勘 同目録』の完成間近にして	1
1996年度「指定研究」研究組織一覧	2
1996年度「一般研究」選考結果発表	3
1996年度「一般研究」研究目的紹介	4
「第7回国際チベット学会」 参加報告	9
彙報	12

『北京版西藏大蔵経丹殊爾勘同目録』の完成間近にして

西藏文献研究チーフ・教授 片野道雄

本学図書館には、貴重なチベット大蔵経の北京版、ナルタン版に加えて、膨大な部数のチベット撰述蔵外文献資料が所蔵されている。北京版大蔵経、および、チベット撰述蔵外文献の、総目録、ならびに索引類はすでに刊行され、また、北京版大蔵経の影印も出版されて久しい。蔵外文献もチベット語訳『大唐西域記』をはじめとして、これまで5点ではあるが、関係の機関から影印版として発刊されている。

所蔵の「北京版チベット大蔵経」は大判の豪華版であって、甘殊爾107帙（影印版、45巻）、丹殊爾225帙（影印版、105巻、目録部1巻）、ツォンカバ全書20帙（影印版、10巻）、チャンキヤ全集7帙（影印版、3巻）、計358帙からなり、6453部の文献資料が収録されている。それらの文献の学術的な意味については、『影印北京版西藏大蔵経総目録・索引』の「はしがき」にも簡潔に記されていて、今日の状況においても変わらない意義をもっているものと思われる。

ところで、この度、『大谷大学図書館蔵 北京版西藏大蔵経丹殊爾勘同目録』の刊行がかねてからの念願として、完了する運びとなった。そもそも、この勘同目録の出版の発端は、すでに1932年に発刊された『甘殊爾勘同目録』によるものであって、その続刊が要請されていたが、ようやく、その刊行の機運が到来して、1965年に『丹殊爾勘同目録』の第一分冊が発行された。このような類の原稿作成に関わる作業は地味な研究作業によるのであって、かつ、今日では手軽にデルゲ版を参見することができる状況にあるが、当初は高野山大学のご協力を賜り、ある程度の纏まった原稿を抱えて、同大学図書館に出向き、デルゲ版との対照による原稿作成を期したのであった。また、その後、

諸般の事情により遅延したが、1976年に第二分冊が、そして、この目録の最終分冊である第9分冊が今年度印刷されることになったのである。

先に述べる「甘殊爾」とはチベット語の *bka' gyur* の音写で、そこには「教訓となれるもの」の意味のものが集録されている。この北京版では、秘密部、般若部、宝積部、華嚴部、諸経部、戒律部、目録の7部から構成されている。一方、「丹殊爾」は、同じくチベット語の *bstan gyur* の音写で、「説述となれるもの」の意味のものが集録されている。北京版では讃頌部、秘密疏部（以上『勘同目録』I、1-6、6分冊）、般若部、中観部、（『勘同目録』II、1）、諸経疏部、唯識部、アビダルマ部（『勘同目録』II、2）、律疏部、更には、歴史、言語、文法、論理、医学、工芸などの諸部門に関する文献（以上『勘同目録』II、3）、ならびに、丹殊爾の目録から成っている。

この北京版は明の永楽版を踏襲して、甘殊爾は1684年に丹殊爾は1724年に開版せられたという。また、1729年ころ、デルゲ王によって「デルゲ版」が開版されたが、各版によってその特色のあることは述べるまでもない。

近年、デルゲ版のチベット大蔵経の論疏部の影印が、東京大学文学部印度哲学印度文学研究室のご尽力で刊行されている。それには、中観部、唯識部、因明部に関する文献が集録されており、それぞれの目次には各文献についての豊富な注記がなされていて、文献資料の公開の意味を高めている。この『丹殊爾勘同目録』はまた勘同目録として、第一分冊時より時代状況が変化してきているとはいえ、所期の基本方針を踏襲しており、いささかではあるが、『甘殊爾勘同目録』とともに学界に資するものとなるに違いない。

1996(平成8)年度「指定研究」研究組織一覽

研究名	研究課題および研究組織
特定研究 大学史編纂研究 代表者 学長・訓覇 曄雄	研究課題 「近代における大谷大学の成立と展開の研究」 研究員 武田 武磨 (チーフ・教授) 門脇 健 (助教授) 佐賀枝夏文 (助教授) 一瀬 真 (専任講師) 宮崎 健司 (専任講師) 片岡 了 (所長・教授) 安藤 文雄 (主事・助教授) 福島 栄寿 (光華女子大学真宗文化研究所職員) 研究補助員 星名 万美 (大学院博士課程3回生・自灯寮寮監) 平原 晃宗 (大学院博士課程2回生) 三浦 統 (大学院博士課程1回生) 御手洗隆明 (大学院博士課程満期退学)
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・訓覇 曄雄	研究課題 「諸外国における仏教研究の動向と展開の研究」 研究員 安富 信哉 (チーフ・教授) 友田 孝興 (教授) 宮下 晴輝 (助教授) 加来 雄之 (専任講師) 樋口 章信 (専任講師) Robert F. Rhodes (専任講師) 渡辺 啓真 (専任講師) 片岡 了 (所長・教授) 安藤 文雄 (主事・助教授) 嘱託研究員 羽田 信生 (沼田仏教翻訳研究センター研究員) Mark Blum (フロリダアトランティック大学教授) 研究補助員 Alfred Bloom (ハワイ大学名誉教授) 山本 和彦 (本学非常勤講師) 田村 晃徳 (大学院博士課程1回生)
特定研究 蓮如研究 代表者 学長・訓覇 曄雄	研究課題 「現代における真宗の再興」 研究員 鍵主 良敬 (チーフ・教授) 臼井 元成 (教授) 神戸 和磨 (教授) 一色 順心 (助教授) 大内 文雄 (助教授) 草野 顕之 (助教授) 須藤 訓任 (助教授) 延塚 知道 (助教授) 三浦 智彰 (助教授) 片岡 了 (所長・教授) 安藤 文雄 (主事・助教授) 嘱託研究員 寺川 俊昭 (大学院特任教授) 研究補助員 一條 顕良 (大学院博士課程2回生) 武田 未来雄 (大学院博士課程2回生) 山田 恵文 (大学院博士課程1回生)
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・訓覇 曄雄	研究課題 「東本願寺近世近代史料の調査・整理および目録作成」 研究員 名畑 崇 (チーフ・教授) 大桑 齊 (教授) 木場 明志 (助教授) 嘱託研究員 上場 顕雄 (本学非常勤講師) 谷端 昭夫 (本学非常勤講師) 西田 真因 (真宗大谷派教学研究研究所員) 研究補助員 福島 和人 (本学非常勤講師) 平野 寿則 (大学院博士課程3回生) 武田 朋宏 (大学院博士課程2回生) 村上 紀夫 (大学院博士課程1回生)
委託研究 西藏文献研究 代表者 学長・訓覇 曄雄	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究」 研究員 片野 道雄 (チーフ・教授) 小川 一乗 (教授) 小谷 信千代 (助教授) 白館 戒雲 (助教授) 兵藤 一夫 (助教授) 嘱託研究員 今枝 由郎 (フランス国立科学研究センター主任研究員) 研究補助員 福田 洋 (東洋文庫研究員) 加藤 秀樹 (大学院博士課程満期退学) 吉田 暁正 (大学院博士課程3回生) 三宅 伸一郎 (大学院博士課程1回生)
委託研究 大蔵経学術用語研究 代表者 学長・訓覇 曄雄	研究課題 「『大正新脩大蔵経』経集部関係典籍における学術用語の研究」 研究員 古田 和弘 (チーフ・教授) 木村 宣彰 (教授) 織田 顕祐 (専任講師) 山野 俊郎 (専任講師) 研究補助員 長沢 巳 (大学院博士課程満期退学) 采翠 晃 (大学院博士課程1回生)

1996(平成8)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
神戸 和磨	研究課題 「近代における仏教研究の方法論—近代の仏教研究における清沢満之の地位と基礎資料の検討—」 研究員 神戸 和磨 (教授) 一楽 真 (専任講師) 加来 雄之 (専任講師) 嘱託研究員 木越 康 (助手)	170万円
吉元 信行	研究課題 「大谷大学図書館所蔵パーリ語言葉写本の文献的研究」 研究員 吉元 信行 (教授) 長崎 法潤 (教授) 嘱託研究員 池田 正隆 (大阪外国語大学非常勤講師) 研究補助員 舟橋 智哉 (大学院博士課程1回生)	170万円
滋賀 高義	研究課題 「三朝高僧伝の比較研究」 研究員 滋賀 高義 (教授) 竺沙 雅章 (教授) 若槻 俊秀 (教授) 河内 昭円 (教授) 大内 文雄 (助教授) 織田 顕祐 (専任講師) 佐藤 義寛 (専任講師) 山野 俊郎 (専任講師) 嘱託研究員 今場 正美 (本学非常勤講師) 西尾 賢隆 (花園大学教授) 研究補助員 島津 京淳 (大学院博士課程満期退学)	170万円
荒井とみよ	研究課題 「書簡体の研究」 研究員 荒井とみよ (助教授) 友田 孝興 (教授) 並木 治 (助教授) 村井 英雄 (助教授) 村瀬 順子 (助教授)	170万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
加藤 尚子	研究課題 「シロイヌナズナにおけるキメラ植物の創出」 研究員 加藤 尚子 (教授)	80万円
中森 一郎	研究課題 「神統流に関する研究—伝承過程並びに泳法の解明に関わって—」 研究員 中森 一郎 (助教授)	80万円
番場 寛	研究課題 「ジャック・ラカンにおける“愛”と“欲望”の理論の研究」 研究員 番場 寛 (専任講師)	80万円
Robert F. Rhodes	研究課題 「『往生要集』の研究」 研究員 Robert F. Rhodes (専任講師)	80万円

1996(平成8)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

近代における仏教研究の方法論 —近代の仏教研究における清沢満之の 地位と基礎資料の検討—

研究代表者 神戸 和磨
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之は、近代における仏教研究に大きな視座を与えた。しかし清沢の仏教研究の方針と思想は当時の仏教研究・哲学研究の思想状況の中でどのような位置づけをもったか十分に明らかにされていない。特に今日、近代における仏教研究の方法論が根底から問われている中で、その出発点において清沢の果たした役割が明確にされる必要があると考える。これまで真宗学科を中心に進められてきた共同研究においては、清沢自身の時間軸としての思想的背景について検討されてきた。今後さらに、時代の中での空間軸としての思想的意義についても明らかにしなければならない。ここに本研究の目的がある。

ところが、これまで清沢研究の基本資料となっていた『清沢満之全集』（西村見暁編 法蔵館刊 以下「八巻本」と略す）が絶版になっており、多方面からの研究に耐える基礎資料が広くもとめられている。この課題については、安富教授をチーフとした「1993・1994年度の共同研究 近代における仏教の展開—清沢満之の思想形成の研究と基礎資料の集成—」において、資料収集につとめられ、「八巻本」との校訂が終えられている。その資料検討の結果、「八巻本」も基本資料として十全なものであるということとはできないことが明確になり、研究に耐える基礎資料が十分な検討の上で、作成される必要があると考えている。

本研究は昨年度よりの継続であるが、上述したような現状をふまえて、今年度は本学の使命ともいふべき清沢の全集作成のための具体的な方法を検討していくことに主眼を置いている。その際に、個々の資料のもつ位置及び意義を体系的に検討することにつとめ、その成果を公表できる形にしていく予定である。具体的には、以下の諸点についての作業を進めていく。

1、資料の公開と全集刊行を視野に入れた上で清沢の基

礎資料のデータベース化。

2、清沢の基礎資料の検討会と解題の作成。

3、清沢関連論文のデータベース化。

4、清沢の時代社会背景を研究するための研究会の開催。

以上の作業を通して、今年度中に本学の学生が清沢に学んでいくための基本的なテキストを作成する予定である。

共同研究

大谷大学図書館所蔵 パリ語貝葉写本の 文献的研究

研究代表者 吉元 信行
(仏教学)

大谷大学図書館には、南方上座部仏教の貝葉写本が多数蔵されており、我々研究員が中心となって長年目録出版の作業に携わってきたが、昨年度末『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』（大谷大学図書館編、平成7年3月刊）として、詳細な目録が出版された。

この貝葉は、目録作成のための現地調査によって、東南アジア地域で書写されたものであるが、現地では散逸しかけている貴重な文献群であることが判明した。しかも、この文献群は、愛知学院大学の前田恵學教授が指摘する如く（「海外におけるパリ写本の保存状況」『仏教学』第14号、p.13、1982年、10月）、内外の研究者からも以前から注目されているところである。先般、この目録が内外の研究機関に寄贈されたが、さっそく多数の反響が寄せられており、この貝葉写本を研究しようとする学外の研究者が殺到することが予想される。

ところで、この写本群は、入手経路も様々で、また、系統立てて蒐集されたものでもないため、学術的に資料的価値の高いものから低いものまで玉石混濁であるといってもよい。中には、重要な資料で、まだ校訂出版されていないものや、出版されていても校訂が不完全で、本写本との校合によりさらなる学術的成果の期待される稀覯写本もいくつか存在する。そこで、今回の共同研究により、本学に所属・関係する我々が本写本群の概要を明らかにし、特に重要と思われる資料を抽出して、これ

ら稀観写本の研究に着手することは、これら貴重な資料を蒐集した本学の先達の願いに応えることになる。

本学所蔵の貝葉写本には、(1)シャム王室より大谷光演師に寄贈されたと伝えられるクメール文字・ビルマ文字・モン文字写本群と(2)入手経路不明のランナー文字・クメール文字写本群とがあるが、本年度は、研究スタッフと研究経費の都合で(1)の写本群について共同研究を進める。

まず、『貝葉写本目録』にもとづいて、各写本の資料的価値についての調査をし、その概要を明らかにし、分類・整理をする。それによって、その中から2～3の稀観写本を抽出し、解読研究をなし、学界への公表の方法について調査・検討する。

本研究は、散逸しかけている貝葉写本を解明するという点で、パリー仏教・東南アジア仏教文化の研究に貢献できると確信する。

共同研究

三朝高僧伝の比較研究

研究代表者 滋賀 高義
(東洋仏教史)

梁の慧皎の『高僧伝』・唐の道宣の『続高僧伝』・宋の贊寧の『宋高僧伝』は、中国に仏教が伝来したその初期から唐に至る間の高僧の伝記集である。これらの所謂三朝高僧伝は、従来より仏教史上の正史として扱われ、その記載事項は史実の証明として利用されてきた。しかし近年の研究は一層確度の高い基礎資料、すなわち撰者が拠り所としたであろう碑文などの原資料を探求し、もって史実の確実性を高めようとする傾向にある。原資料が十分に備わり、高僧伝類との比較が容易に可能であれば、史実の確度は一層高まり、仏教史上広範囲にわたって過去の不明を補い、錯誤に訂正を加えることができるに違いない。

もともと、現状まことに残念ながら『高僧伝』および『続高僧伝』においてはそれらの基礎資料を著しく欠いており、ひとり『宋高僧伝』のみが相当豊富にそれらを今日に残している。そこで本研究は、第一次の作業とし

て贊寧が依拠した唐代高僧の碑文を精読して『宋高僧伝』の本文と比較し、原資料に対して史家贊寧がいかに対応したかを明らかにするものである。道宣は慧皎の『高僧伝』を意識して『続高僧伝』を著わし、贊寧は前出二者を意識して『宋高僧伝』を撰じた。仏教史家贊寧の拠って立つ所以を明確にするこの第一次作業を通して、『高僧伝』および『続高僧伝』の資料としての確度をあらためて確認しようとするのが、本研究の最終的な目的である。

原資料を精読することを第一次作業とする本研究は、伝統的な文献学・考証学の手法とコンピューターのカード機能を利用する現代的な手法とが不可欠である。これらの手法を用いて毎週一回の研究会を開催し、資料の輪読作業を行なう。

碑文などの原資料を精読するためには中国の史学のみならず、文学・語学・仏教学等多くの専門分野の知識の集合が必要である。仏教学においてはとりわけ禅・天台・律・華嚴・浄土教学の専門研究者の参加が望まれるところであるが、幸いこれらの要件をおおむね満たすことのできる共同研究者の参加を得たので、研究目的の達成に努める所存である。

なお、本研究班は、参加者のすべてが研究会で討議されたことがらを自由に利用してよいこととしている。共同研究者各自の判断においてその成果が逐次現われることも期待される。

共同研究

書簡体の研究

研究代表者 荒井とみよ
(国文学)

書簡には、公的私的を問わず、伝達的手段として発達してきた長い歴史がある。おそらく世界に存在する言語の数だけその歴史はあるだろう。この書簡の方法を文章表現に用いた、いわゆる「書簡体」は文学だけでなく、哲学や宗教をはじめとする各分野で、効果的な方法として表現者を引き付け、読者を魅了してきた。

書簡が時代や社会の申し子であるように、書簡体もまたそれらを反映しているはずである。言語を異にし風俗を異にするさまざまな文化の中で、書簡と書簡体がどのような発達をしてきたか、どのように受けとめられてきたかを見渡すことで、比較研究を試みることができるのではないだろうか。それがプロジェクトを組織するにあたっての共通する問題意識である。

個別テーマとして、近代日本文学における書簡体の意味と役割(荒井・村井)、イギリス文学における書簡体小説の展開(村瀬)、ドイツ文学における書簡体表現と書簡(友田)、フランス近代思想と書簡体表現(並木)を設定している。これらのテーマは、研究の進行の中で変容と深化をみるはずである。その結果としてプロジェクト自体もより拡大できるのではないかと考えている。すなわち問題に応じて相応しい研究者を学内、学外を問わず招聘するのである。最終目標は成果を上梓することである。

『手紙の時代』(高橋安光)はフランスにおける書簡の研究であるが、序章に「手紙の楽しみ」を置いている。「手紙党の一人として」という個人的な嗜好から書きはじめられているのは、示唆的である。書簡の研究の方法はおそらくそういうところから始められるべきだということではなからうか。個人的な嗜好の感触を手放さないことが、書簡体の研究を豊かなものにするだろう。

国際文化学科および文化学科のカリキュラム充実のために、いまほど比較研究が求められているときはない。われわれのプロジェクトが学科の枠を越える連携を目指すことで、学内の教育研究の活性化に寄与できれば、目的の一部は達成したことになるであろう。

個人研究

シロイヌナズナにおける
キメラ植物の創出

研究代表者 加藤 尚子
(分子生物学)

シロイヌナズナ (*Arabidopsis thaliana*) はヨーロッパや北米に多い小さな雑草である。1950年代からシロイヌナズナの種に X 線照射などをして、突然変異体が多く単離されていた。そしてそれらの多くの突然変異体の遺伝的な解析により、五対ある染色体について、染色体地図もつくられている。1980年代に入ってシロイヌナズナの突然変異体の表現型の研究が精力的に行われるようになった。シロイヌナズナは植物の中で最も遺伝子の数が少ないものの一つであるので遺伝子を取り出して解析するには有望な材料と考えられたのである。また遺伝子の数が少ないというほかに、植物体が小さく栽培が容易であること、種をまいてから花が咲き、種になるまでに二ヶ月ほど短いため遺伝的な解析がしやすいことなどの理由から近年盛んに研究が行われるようになった。

これらの突然変異体を使った研究で代表的なものは、花の器官形成に関するものである。正常な花は下から、がく、花卉、おしべ、めしべの順にできるが、ピステイラータという変異では、がく、がく、めしべ、めしべの順になってしまう。すなわち花卉のできる位置にがくが、おしべのできる位置にめしべができてしまっている。いろいろな花の器官形成に関する変異体を使って遺伝子が器官形成をどのように決定しているかについての鮮やかなモデルが提出された。このように突然変異体を用いる事により植物の発生や形態形成の過程を解明する糸口をつかむことが可能となる。

一方、植物は動物と違って、分化した細胞の全能性が高い。根や茎に分化したものの一部からでも植物ホルモンにより未分化の状態に戻すことができ、それをもう一度完全な植物体にすることができる。この技術をカルス培養と再分化という。多細胞生物の形態形成は細胞が位置を認識して、分化する過程である。特に植物の場合は細胞運動がなく順に分裂した細胞がその位置に従って分化するものと考えられる。その分化を制御しているのが遺伝子であるから、遺伝的に変化を持っている細胞と正

常な細胞が混ざっていたらどの様な形になるのだろう。このように遺伝的に一部違っている細胞が混ざりあった生物体をキメラという。本研究は変異を持つものと持たないもの各々からカルスをつくり、二種のカルスを混合し、再分化することによりキメラ細胞を持つ植物体を作ることを試みるものである。キメラ植物ができれば、その表現型とキメラの細胞を解析することにより二種の細胞が区別できれば、細胞の分化の過程にその遺伝子がどのような役割を果たしているのかを知る事が期待されるだろう。

個人研究

神統流に関する研究

—伝承過程並びに泳法の解明に関わって—

研究代表者 中森 一郎
(体育学)

現在、我が国に伝承されている泳法流派において、鹿児島市に伝わる‘神統流’は、最古の歴史を有すると云われている。また、神統流の伝承方法は「家伝」という独自の形態を持ち、その用語においては「潮手續法」・「業三品」・「水迫仙法」等に代表されるような特異な呼称を用いたり、泳法においても「正」・「奇」・「要」・「変」と変化する複雑な構成を持っている。さらに、このような神統流の特質が災いしてなのか、その伝承が廃藩置県後一時断絶状態となり、故黒田清光第十六代神統流宗家によって大正後期から昭和初期頃にかけて復興されるに至ったようであるが、現在は伝承の命脈を保ちつつも脆弱の観は否めない状態である。

この神統流に関する研究は、数年前まで故黒田清光第十六代宗家によるものを見るのみであったが、中森・岩下の共同研究『日本泳法神統流に関する研究—神統流の伝承過程を中心として—』（平成2年～平成4年文部省科研費補助）によって、黒田清光による神統流の復興過程から今日までの伝承過程が凡そ明らかとなった。しかし、流派創始から幕藩体制下における伝承過程については、実質的には未解明と言っても良い状況にある。また、泳法の伝承においても、現在、故黒田清光第十六代神統流宗家の子息（三男）がただ一人存命していることと血縁者一名及び第十六代宗家に師事を受けた数名の泳ぎ手

があるのみである。加えて、この泳ぎ手である伝承者達は高齢化の一途であり、しかも同流のすべての泳法が伝えられていない実情にある。

本研究は、これらの状況を鑑みながら、1. 神統流の創始から幕藩体制下における伝承過程までを調査研究することで同流の伝承過程の全体像を捉えたいこと、2. 同流の全泳法を解析・整備することによって具体的に各泳法を明文化しつつ泳法の実演を画像化すること、まで進めたいと考えている。

伝承過程に関わる発明においては、島津藩の記録（『島津家文書』・『玉里文書』等）の調査と黒田家に関する資料（同家保管文書・同家所縁地関係図書等）の調査を予定している。泳法の解明・整備においては、故黒田清光第十六代宗家の同流泳法に関する解説文を参考にしながら、黒田家を中心に神統流泳法の伝受者の方達と相談・検討の上で、全泳法の具体的な泳ぎ方を確定し文章化を進める作業と実演を計画してそれをVTR収録等で映像化する作業までを予定している。

個人研究

ジャック・ラカンにおける

“愛”と“欲望”の理論の研究

研究代表者 番場 寛
(フランス語・フランス文学)

フロイトの無意識の探求を大胆に論じ直し、「無意識は言語として構造化されている」と言ったのはジャック・ラカンである。臨床経験に基づき、人の心の病の原因を性意識の発達のねじれの内にとらえたのがフロイトであるなら、ラカンは構造言語学以降の知の成果を踏まえて、心の病を構造的に捉えようとした。ラカンの獨創性は、既にフロイトにおいて行われていた言葉によって人の心を探る方法を徹底的に押し進めて、シニフィアン（言葉の表現面のイメージ）によって行ったことだ。ラカンは「あるシニフィアンはもう一つの他のシニフィアンに対し主体を表象する」と言い、また「人間の欲望は大文字の他者の欲望である」とも言っている。これは従来の主体概念から大きく転回するものである。こうしたラカン理論においては、「生」の重要な側面である「愛」と「欲望」はどのようにとらえられるのであろうか。こ

の問題に対し、今年度は以下のように研究を進めたい。

まずラカン理論において「欲望」の問題を解く鍵となる概念でありながら、いまだ十分には解明できていないラカンにおける「ファルス」の概念を探りたい。そのためまず、フロイトの扱った少年ハンスの症例を不明な箇所は原文にあたりながら精読したい。次にこの症例を中心に論じ、ファルスの概念を展開している、ラカンの『セミナー第四巻』と、愛と欲望の問題の一つとしてファルスの問題について論じている『セミナー第八巻』とを読み比べて理論の展開を見極めたい。更にそのファルスの概念が文学作品の分析においてどのように機能しているかをラカンの『ハムレット論』の中に探りたい。この研究の成果の一部は、6月に開かれる「日本フランス語フランス文学会」で発表したい。

また、7月にフランスで「ラカン以後」という題目で、泊まりがけのコロック（研究会）が開催される。研究発表の題目が発表されたらそれに合わせて可能な限り参加し、世界のラカン研究の最新の情報を得たいと思っているし、世界の研究者と意見を交わしたいと考えている。

このようにラカンの『セミナー』と『エクリ』をフロイトの著作に照らし合わせて精読することにより愛と欲望を構造的にとらえたいと考えている。

個人研究

『往生要集』の研究

研究代表者 Robert F. Rhodes
(仏教学)

恵心僧都源信（942—1017）は、日本における浄土教の発展に多大な影響を与えた『往生要集』の著者として有名であるが、それとともに彼は当時の最も優れた天台宗の学僧でもあった。私は1993年に米国ハーバード大学に提出したドクター論文において、従来あまり注目されなかった『一乗要決』という源信の著作を取り上げた。その論文の一部として、源信の生涯や思想について概説した一章を設け、その中で彼の『往生要集』や浄土信仰について簡単に述べておいた。しかしそれは当然のことながら、まったく不十分なものであった。そこで本研究では、だれもが源信の最も代表的な著作と認めるであ

う『往生要集』に焦点を当て、彼の浄土思想を考察してみたい。

欧米でも戦前から『往生要集』の重要性は認識されて、すでに1930年には『往生要集』の最初の2章（「厭離穢土」と「欣求浄土」2章）の英訳が A. K. ライシャワー教授によって発表されている。後に1970年には、バーモント大学の Allan Andrews 教授が『往生要集』を主題とした *Essentials for Rebirth* を著された。しかし残念なことに、それ以来、『往生要集』の研究はほとんど欧米では行われていない。また Andrews 教授の書物は『往生要集』の内容を簡単に記述した、極めて概略的で短い（130ページほど）のものであり、決して『往生要集』の思想を十分に紹介した書物とはいえないように思われる。このような事情のもと、私は以前から英文による『往生要集』の本格的研究の必要性を深く感じていた。そこでこの個人研究プロジェクトでは、『往生要集』の教義を、特に源信の念仏観を中心として、英文でまとめたいと考えている。

本研究は大きく分けて、資料収集の段階と、『往生要集』解説の段階とに区別することができる。

(A) 資料収集。本研究は、基本的には大正新修大藏經に納められている『往生要集』のテキストによるが、それ以外に出版されているテキストを収集し、主な註釈書や研究書も収集する計画である。また『往生要集』の思想的、歴史的、社会的背景を知るために必要な研究書も入手する。

(B) 『往生要集』解説。収集された註釈類や研究書等に依りつつ、『往生要集』の解説を行い、重要な箇所を英訳し、その思想（特にその念仏観）について英文でまとめる。

以上のように研究を進めてゆく計画である。

「第7回国際チベット学会」参加報告

西藏文献研究・研究員 兵藤 一夫

国際チベット学会 (International Association for Tibetan Studies) の第7回学術大会が、オーストリアの古都グラーツ近郊のライプニッツにおいて、1995年6月18日(日)から24日(土)まで開催され、真宗総合研究所の西藏文献研究班から、白館戒雲(研究員)、今枝由郎(嘱託研究員)、Steven Hartwell、三宅伸一郎(以上2名は研究班から参加を特別に依頼)、それに筆者の5名が参加した。

本学術大会は、ウィーン大学のSteinkellner教授が大会実行責任者(大会召集者)となり、ライプニッツのシュロース・セッガウ(Schloss Seggau)で一週間合宿する形で行なわれた。シュロース・セッガウは、その名前からも想像されるように、古い城館を宿泊のできるセミナー施設に改良したところで、幾分の機能的不便はあったものの、それを差し引いても余りある環境と雰囲気の良いものを持っていた。本学会は、前回のオスロ郊外のファーガネスでの第6回学術大会(このときの学会の様子は、白館戒雲研究員による参加報告、『研究所報』No. 29, 1993を参照)から参加者・発表者も多くなり、今回は参加者総数は320名を越えるほどになっていたようである。

今大会のおおよその日程は次のようであった。6月18日(日)午後から受付。19日(月)午前に開会式。午後から24日(土)午前まで各セッションやパネルに分かれての研究発表。研究発表は毎日午前9時~正午、午後3時~6時(ときには午後8時または10時まで)、夜はビデオやスライドを使った講演など。また、21日(水)の午後はグラーツへのバスツアー。

各セッションとパネルの内容と発表者数、それに幾つかの発表題目を示せば次のとおりである。

Sections (9) ;

Anthropology (発表数34) ;

Geoffrey Samuel: Shamanic Procedures in Tibetan folk religion.

Lawrence Epstein: Ritual, ethnicity, and generational conflict.

など。

Epigraphy, Art and Archaeology (発表数20) ;

Laxman S. Thakur: Tibetan historical inscriptions from Kinnaur and Lahaul-Spiti — a survey of recent discoveries.

Pasang Wangdu: On newly discovered inscriptions of the royal period.

など。

History (発表数28) ;

Tsultrim Kalsang Khangkar (白館戒雲) : Shel dkar chos 'byung skor.

David Seyfort Ruegg: *Yon mchod, lugs gnyis* and congeners — on “spiritual authority” and “temporal power” in Tibetan society and policy.

Leonard W. J. van der Kuijp: Some Indian and Sri Lankan Buddhist *panditas* in Central Tibet during the 15th century.

など。

Linguistics (発表数15) ;

Michael Hahn: Apropos the term *gtsug lag*.

Roland Bielmeier: Historical grammar and dialect classification of Tibetan.

など。

Literature (発表数10) ;

Jiangbian Jiacao: A critical analysis of the distinct characteristics of *bab sgrung*.

Wei Wu: The Tibetan Gesar epic as a symbol of cultural identity.

など。

Philosophy (発表数26) ;

Birgit Kellner: Types of incompatibility (*'gal ba*) and types of non-cognition (*mi dmigs pa*) in early Tibetan *tshad ma* literature.

Katsumi Mimaki: sTag tshang lo tsa ba on the distinction between sutra and tantra.

José Ignacio Cabesón: Rong ston pa on Madhyamaka thesislessness.

など。

Religion (発表数35) ;

Jeffrey Hopkins: Nāgārjuna's biography from Tibetan sources — the importance of individuals in cosmic time.

Robert A. F. Thurman: Tsong kha pa's view of

tantra — an outline of his personal practice, a summary of some of his principle theories, and a survey of his tantric treatises.

Luis O. Gómez: The Tibetan translation of the smaller Sukhāvativyūha.

など。

Traditional Science (発表数5) ;

Petra Maurer: A first survey of Tibetan hippology and hippiatry.

Fernand Meyer: Traumatology in Tibetan medicine.

など。

Varia (発表数3) ;

Robert Kostka: Contribution to the cartography of the Tibetan Himalaya.

など。

Panels (6) ;

The Computer and its Relevance to Tibetan Studies (発表数8) ; 詳細は後述

Development, Society, and Enviroment (発表数10) ;

Graham Emmanuel Clarke: Sustainable development, and social and enviromental change in Tibet.

Daniel Winkler: The forest of Tibet — human impact and deforestation.

など。

The Middle Asian (?) International Style 12th-14th Century (発表数7) ;

Deborah E. Klimburg-Salter: Definition of the problem and present stage of research.

Kira Samossiuk: The classification of Tibetan style painting from Khara Khoto (late 12th-14th century)

など。

Mountain Deities and their Cults. (発表数13) ;

Xingxian Wang: Mountain spirit and its worship — an ethnological survey of a Tibetan tribe in the dPa' ris district.

など。

Tibetan Culture in the Diaspora (発表数7) ;

Frank J. Korom: Place, space, and identity — the cultural and economic politics of Tibetan diaspora.

など。

Transmission of the Tibetan Canon (発表数10) ;

Helmut Eimer: A source for the first Narthang Kanjur — the Tantra catalogue of Sa skya pa Grags pa rgyal mtshan.

Paul Harrison: Philology in the field — some comments on selected texts in the Ta po collection.

Vladimir L. Uspensky: A note on the Mongolian bKa' 'gyur of 1629.

など。

このように、学会での発表内容は多岐に亘り、しかも筆者はそれら全てを把握していないので、ここでは筆者が直接関わったパネルを中心とした幾つかの報告にとどめる。

白館研究員は、歴史部会において、自身の出身地でもあるシェカル地方の仏教史について発表し、出席者の関心を呼んだようである。

白館研究員を除く筆者等4人は、今枝由郎氏が司会をつとめるパネル The Computer and its Relevance to Tibetan Studies に参加した。今回の学会参加の大きな目的の一つは、真宗総合研究所「西藏文献研究」班が開発に携わってきたパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム、Tibetan Language Kit for Macintosh の紹介とその配付であったからである。このパネルは6月19日午後開催された。そのプログラムは次のとおりである。

Ulrich Pagel: Computerized catalogue of Tibetan materials in the British Library.

Steven Hartwell: Tibetan Language Kit for Macintosh, its development and features.

Kazuo Hyodo, Shin'ichiro Miyake (兵藤一夫、三宅伸一郎) : Cataloguing and inputting of Tibetan texts at the Otani University.

Yoich Fukuda: Tibetan cataloguing and text-editing at the Toyo Bunko.

Masami Kojima: Automatic Tibetan script recognition by computer.

Robert Chilton: 1) General update of Asian Classics Input Project activities. 2) The St. Petersburg Tibetan Catalog Project.

Martin Brauen and Peter Hassler: Computer aided 3D- animation of the Kālacakramandala.

Trevor De Vaney and Wolfram Muller: Tibet on the Internet — databases, newsgroups, software, WWW-homepage of the University of

Graz.

この中、最初の四つの発表は、Tibetan Language Kit for Macintosh に関連したものである。Ulrich Pagel 氏 (British Library) は、当該チベット語システムを使用して、大英図書館所蔵のチベット語資料の目録作成の方法や状況を報告し、パーソナルコンピュータを利用した多言語の資料整理のあり方の一例を示した。次に、Steven Hartwell 氏は、当該 Tibetan Language Kit を作ったプログラマーであり、その専門家の立場から、これまでの開発の経緯とこのシステムの特徴を紹介した。三宅伸一郎氏と筆者は、大谷大学は多くのチベット語文献を所蔵しているが、これまでそれら文献に対する目録(冊子体)を作成してきたこと、今後はコンピュータが利用できるように文献やその目録をデジタル化する必要があり、そのためにパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh を開発したこと、そしてそれを使用して試験的に大谷大学所蔵の西藏文献目録を作成したこと、等を報告した。福田洋一氏(東洋文庫)は、東洋文庫におけるチベット語文献の目録作成の方法とチベット語文献をコンピュータでテキスト処理する際の便利なツール、例えばローマナイズされたテキストを当該チベット語システム(Tibetan Language Kit for Macintosh)に変換するコンヴァータやエディタなどを紹介し、チベット研究においてパーソナルコンピュータ利用の一端を示した。

小島正美氏(東北工業大学)は、これまで東北大学と共同で研究している、コンピュータによるチベット文字の自動認識の方法を発表した。スキャナーを使ってOCRでチベット語文献を文字データ化する方法とその問題点、活字印刷本では実用に耐える認識率(98%程度)が達成されるが、写本や木版ではまだまだ幾つかのクリアすべき問題があることを示された。

Robert Chilton 氏 (Asian Classics Input Project) は最近のACIPの活動状況を報告した。まもなく二枚目のCD-ROMのリリースが予定されているが、これには中観関係の文献が多く含まれていること、ロシアのペテルスブルグに所蔵されている膨大なチベット語文献の目録を作成中であり、まもなくそれが利用できること、などが報告された。

残りの二つの発表は、コンピュータを利用してマンダラを三次元的に表現する試みと、インターネットのホームページを設置することによるチベット研究の資料や情報の公開の一例の報告であった。

われわれの参加したパネルは大会初日に終了したので、翌日からは、大会期間中、毎日、朝から夜まで、一室を借りて当該チベット語システムのデモンストレー

ションをしながら、希望者にそのシステム(フロッピーと英文マニュアル)を無料で配布した。このデモには東洋文庫の福田氏も加わり、氏の作成したコンヴァータ(ACIPの入力データを当該システムに変換するもの)などを紹介、配布した。デモの部屋を出来るだけ長く開いておくため、他の発表を十分に聞くことが出来なかったことは残念であったが、口コミなどにより、日増しにデモを見に来る者が増え、我々のチベット語システムが使いやすい良くできていると好評を博したことは、喜びであった。最終的に我々の配布した数は130を越えていた。

海外での国際学会に初めて参加した筆者は、学会の形態(参加者全員が一週間というかなりの長期間合宿すること)に戸惑いながらも、貴重な経験をすることができた。絶対数としては少ないとはいえ、世界には思いのほか多くの人たちがさまざまなあり方でチベットに強い魅力や関心を抱いていることも知った。学会ということから、極力政治的な色彩を排除するように意図されていたが、会場に政治的な落書きがなされたりして、チベットが中国に占拠されているという現状を呼び起こさせる国際感覚も示されていた。また、今回の学会参加を通して、大谷大学がチベット研究におけるコンピュータ利用の面でいささかなりとも貢献できたことは収穫であった。

真宗総合研究所彙報 1995.10-1996.3

■研究所委員会

11月29日(水) 教授会終了後 校友センター会議室
議題 1. 1996年度「一般研究」の選考について
2. 『研究所報』33、『研究紀要』13の編集
3. その他

■「指定研究」チーフ連絡会

■「指定研究」会議/研究会

大学史編纂研究

10月27日(金) 12時10分~13時 博綜館第3会議室
議題 1996年度にむけての100年通史・図録編纂準備

国際仏教研究

11月14日(火) 12時10分 博綜館小会議室1
議題 第6回国際真宗学会パネルの報告について
11月22日(水) 16時10分 尋源講堂
テーマ Meaning and Referent: An Indian Perspective
講師 V. N. Jha 教授(プーナ大学サンスクリット語高等研究所長)

大蔵経学術用語研究

10月27日(金) 16時10分 校友センター会議室
議題 今年度の研究に関して

■「一般研究」会議/研究会

日本思想の歴史的総合研究・研究会

10月6日(金) 17時40分 第2研究室分室1
テーマ 中世における「哲学」という名前と概念
講師 小浜 善信 本学非常勤講師
11月7日(火) 17時 第2研究室分室1
テーマ 哲学(思想)としての儒教
講師 辻本 雅史 京都大学教育学部助教授
1月10日(水) 17時~19時 第2研究室分室2
テーマ 明治以降の日本の哲学
講師 堀尾 孟 教授
2月28日(水) 14時~ 29日(木)

関西セミナーハウス

テーマ 今後この研究をいかに発展させていくか
参加者 大河内了義 研究チーフ 他12名

近代における仏教研究の方法論—近代の仏教研究における清沢満之の地位と基礎資料の検討—研究会

3月22日(金) 12時 真綜研2F会議室

テーマ 清沢満之のテキスト編集について

講師 西村 見暁氏(「清沢満之全集」の編集者)
寺川 俊昭 教授

■学会参加/調査派遣

★西日本大学史担当者会第12回例会

10月17日(火)、名古屋シンポジオン・愛知会館において西日本大学史担当者会・東日本大学史連絡協議会1995年度合同研究部会が開かれ、真宗総合研究所主事兵藤一夫が参加した。

★AAR (the American Academy of Religions)

11月18日~21日まで、ニューヨーク・フィラデルフィア(ペンシルバニア州)においてアメリカ宗教学会が開催され、国際仏教研究班ロバート・F・ローズ研究員が参加した。

★チベット語文献のパソコン利用について

情報収集調査

11月6日~8日まで、ニューヨーク Asian Classics Input Projectにおいて、西藏文献研究班 今枝 由郎 嘱託研究員がこれにあたった。

研究所報 第34号

1996年7月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒602 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel. 075-212-5500 Fax. 075-212-5501